

## 平成28年度第2回職務執行状況報告

平成28年度「北海道特別支援学校寄宿舎指導員等フットサル研修会」についての実施状況をご報告申し上げます。

同研修会には、平成29年3月18日(土)、北海道青少年会館にて開催しました。

道内各地の知的障がい特別支援学校寄宿舎指導員(教育職)及び教諭の皆さんが34名参加しました。

本研修会は、理事長の挨拶に続いて、フットサルの歴史や競技の特性等について、日本フットサルリーグ「北海道エスポラーダ」選手OBの吉田順省氏((社福)明日佳職員)と笠間慎也氏((社福)長沼陽風会職員)が講義し、続いてフットサルのルールについて(一財)北海道フットサル連盟常務理事荒川浩幸氏が講義しました。午後からは、足裏のボールコントロールやトウキックなどのフットサル特有の足技技術と審判法の実技講習を行いました。

この研修会に参加した寄宿舎指導員等の皆さんには感想・意見などをアンケートとして書いてもらいました。参加した全ての方からは、特別支援学校職員を対象にした本研修会への肯定的な意見等を頂くことができ、安堵しました。

この中の2件のアンケート回答を書き写しますと、まず北海道美深高等養護学校男性職員は「理事長の冒頭のご挨拶にありましたように、フットサルを通して、体力のみでなく精神力の強さを育てるという理念に感銘を受けました。本校でも体力づくりの中で、一つのことをやり抜く力を育てることに取り組んでいますので、今後も社会の中で定着していける生徒たちのために、フットサルの指導を通して、「心」を育てていければと思います。また、美深町のスポーツ推進委員を担当しておりますが、「共生社会」の実現を目指す視点で、本校生徒のみならず、美深町の子供たちも一緒に参加できるようなフットサル教室、クリニックのようなものを開催して頂ければお手伝いさせていただきます。障害のあるないにかかわらず、地域に開かれた学校として、地域の障がい者理解も広げていきたいと思っております。今後もこのような研修会がありましたなら、是非、参加したいと考えております。」と記しております。

また北海道稚内養護学校女性職員は「～いつでも どこでも だれでも できる フットサル～ということなので、寄宿舎生活の余暇時間でボールに触れることから、子供たちと始めていきたいです。私自身サッカーを行ったことがないので、是非、舎生の子供たちと遊びから楽しく始めたいと思います。今日はありがとうございました。また参加したいです。」と記しており、本研修会の成果を各学校の児童生徒や教育課程の中で反映させたいとの意向も多くの方は記しておられました。

来年度は、この度、参加された方々のご意見等、また当財団のフットサル活動充実に向けた事業への願いなども踏まえつつ、かつ、平成29年度から実施する特別支援学校での障害の重い児童生徒へのフットサル指導や、特別支援学校と地域の人々とのフットサル交流活動等をテーマにした研究指定校の成果報告等も併せて、本研修会をより充実して開始したいと思っております。併せて、研修会内容のより一層の改善と、参加者への昼食の提供等を取りやめるなど、支出の工夫もしていきたいと思っております。

次に、別添資料として同封いたしました「北海道通信 平成29年3月24日」掲載記事について

てですが、この北海道通信(教育版)は、全道の道立学校の全てと178市町村教育委員会が取っている日刊紙です。別添資料は、前項で述べた「北海道特別支援学校寄宿舎指導員等フットサル研修会」についてと、当財団の平成29年度事業計画案を掲載しております。ここに当財団の特別支援学校児童生徒へのフットサル活動等を通じた公益事業が広く紹介されたことにより、当財団の在り方などへの周知がより一層深くなったものと考えております。今後も、当財団の事業の成果等は、北海道通信を通して、広く道内教育界に喧伝されるよう努めたいと思っております。

3点目として、北海道ハンディキャップスキー協会が主催し、当財団が後援した「明日佳グループ杯第38回全道ハンディキャップスキー大会」についてお伝えいたします。

このスキー大会は、3月19日(日)、手稲山スキー場で開催されました。理事長は、明日佳グループ代表でもありますので、この両者を代表して、今後も当該スキー大会を後援する旨をお話ししました。特に、障がい者スキーを行うアスリートとして、障がいがあってもなくても体を鍛えることの尊さなども併せてお話ししました。

このスキー大会は、1980年、かつての三笠宮寛仁親王のご指導・ご発案で始まった大会で、障がいのあるなしにかかわらず、スキー大会を共に作りあげ、共に競い合い、共に喜びを分かち合うことを標榜し、創設された大会です。

歴史ある本スキー大会の後援については、2005年から後援を続けてきた札幌大通ライオンズクラブから引き継いだものです。

スポーツ大会を俯瞰すると、障がいのない人を中心としたオリンピック、また身体障がい者の人を中心としたパラリンピック、さらに知的障がいの方のスペシャルオリンピック、聴覚障がいのある人へのデフリンピックがあります。

新たに後援するこのスキー大会は、視覚障がいの方に対する後方・前方からの誘導スキーや、肢体不自由の方のシットスキー・アウトリガースキー、知的障がいの方のスキー、障がいのある児童生徒の障がいのない兄弟のスキーなど、障がいの有無にかかわらず多様な方々が参加するユニークにスキー大会であることです。スキー大会の成績判定は、設定したコースのタイム判定と、自己申告タイムと実走タイムの差の長短判定による独自のルールが採用されています。このルールもかつて、寛仁親王がご発案されたとのことでした。

さて平成29年度は、4月から、当財団の各種事業が本格的に動き出し、道内各特別支援学校や北海道教育委員会、札幌市教育委員会等の関係機関との連携も深まっています。また当財団が、何よりも念願としている公益財団化への移行手続きも開始いたしますので、理事各位のご支援ご指導など何卒宜しくお願い申し上げます、平成28年度2回目の理事長及び業務執行理事の職務執行状況報告といたします。